

## Kidney Week 2012—American Society of Nephrology (ASN) 45th Annual Meeting

田中健太郎

東邦大学医学部腎臓学講座



2012年10月30日～11月4日に、米国サンディエゴにて開催された American Society of Nephrology (ASN) Kidney Week へ酒井 謙教授、米国クリーブランドクリニック留学中の先輩である大橋 靖医師と参加した。ASNは Nephrologist にとっては欧州腎臓・透析移植学会議 (European Dialysis and Transplant Association : EDTA) と並ぶ大規模な国際学会である。

ASN参加の前に、クリーブランドクリニック留学中の大橋医師がいるオハイオ州クリーブランドに施設見学を兼ねて国産土産を持参し応援訪問した。クリーブランドは、はっきりいって田舎であるが、大型クリニックを中心とした医療関連クラスターは、世界クラスの病院、研究機関、およびインキュベータから構成され、バイオ医療の研究および技術を強みとしており、日本からだけでなく世界からも多くの留学研究生を受け入れている。大橋医師は既に留学2年目に突入しており、ある程度現地生活にも慣れ、研究も最終段階にあり奮闘中であった。研究の合間を縫って巨大なクリニックおよび街を案内していただき、当初は楽しい時間を過ごしたが、途中で超大型ハリケーン「サンディ」が上陸したため状況は一変した。一刻も早く米国腎臓学会が開催されているサンディエゴに退避したい気持ちに駆られた。さらに、合流するはずの酒井教授は「サンディ」に直に被災し、私は航空便を変更した。はたしてサンディエゴに発表前日に到着すると天候は快晴であり南国のような雰囲気気分は一気に改善した。この超大型ハリケーン「サンディ」は大西洋観測史上過去最大で、11の州にまたがって大きな爪痕を残し4万を超える世帯が自宅に戻れない状況であった。

今回の発表タイトルは、「Serum uric acid is an independent predictor of new onset of diabetes after living-kidney



サンディエゴの Congress 会場周辺



サンディエゴの会食

transplantation」でポスター発表した。その際、知見をもつ医師・研究者らに直接意見を聴きに行ったりしたが、極東の島国である日本の東邦大学医学部腎臓学講座オリジナ

ルデータリサーチは世界にも十分に通用するということが認識でき、大きな収穫であった。留学中の大橋医師は、採択率20%という難関の口演発表に2演題、さらにポスター1演題パスしており、後輩としてもオーディエンスに参加し雄姿を見守った。ASNは、今回から症例報告も取り入れており演題採択の閾値が良い意味でも悪い意味でも低下した。以前のASNでは、研究大国米国のイメージ通り基礎研究の発表内容が多い印象があったが、近年は特殊な研究機器が必要なく、どこにいてもできる臨床系の研究が好まれるようで、口演およびポスター発表も明らかに臨床系内容に傾いてきていた。臨床研究をメインとしている東邦大学医学部腎臓学講座では幸いなことであるが、腎疾患自体の病態解明に取り組んでいる研究は少なく、そのような面から本学会自体が斜陽化してきている印象があると古くから参加している先生方は言っている。しかし、今後も世界の最先端の腎臓学をいち早く取り入れるには非常に有用で

インスピレーションを得られる重要な学会であることは不変である。

また、水入前教授ともお会いしご健在な様子を確認することができ、うれしく感じた。さらに翌日ハリケーン「サンディ」から退避された酒井教授と無事に合流し、大橋医師と3人で会食をした。学会・研究に関連したさまざまな内容について話し合ったと思うのであるが、途中からは発表終了からの解放と南国気分のためかワインが瞬く間に蒸発していった記憶しかない。今後もリサーチマインドを刺激する1つのきっかけとしてASNを含む他の国際学会には、自分だけでなく柔軟な思考を持つ後輩医師をより早い段階から積極的に巻き込んで参加したいと思っている。

最後に、このような貴重な施設見学・学会に送り出していただいた腎臓学講座の先輩後輩スタッフ、執筆の機会を与えてくださった関係者先生方に深謝いたします。